出会い（22）

宋渕（そうえん）禅師

奥村　一郎

「正師を得ざれば学せざるに如かず」：道元禅師「学道用心集」の鋭い言葉。事実、旧制高校時代、若き日に出会った宋渕老師は文字通り、私にとっての正師であり、人生の尊い導師でもあった。そのことについては、すでに数回にわたり、本誌において紹介してきたが（「出会い」第1、2、19回参照）、ここではまたさらに、幾つかの忘れられない小噺をとりあげてみたい。

1.チリチリ花

お寺を訪ねたのは秋も終わりのころだったと思う。厚い緑の杉に覆われた寺の庭には、薄（すす）きや野の花が咲いていた。きれいに頭をそった若い雲水さんが玄関に出てこられて、丁寧にご老師の部屋に案内してくださった。いつものように、明るい静かな面持ちで迎えてくださるご老師は、普段の応接間ではなく、特に、二百年にひとりの傑僧とまでいわれた先代山本玄峰老師のお部屋に案内していただいた。玄峰老師は学生時代にお会いし、「提唱」(*)にもあづからせていただいたこともあった。2階の部屋でしばらく座って待っていると、老師が出てこられ、いつもの茶道具と、最近、イスラエルの聖地に行かれた時のお土産とか、よく知られた死海の塩でつくられたといわれる羊羹をもって階段を上がってこられた。その時、ふと目をあげると、部屋の入り口の柱につけられた花瓶の小さな野花に気がついた。茎もクニャとなり花も葉も落ちそう。水が足りないのかな。かわいそうに。禅寺でも男寺だから、世話がゆきとどかないのかな？などと、気を散らしていると、その時、抹茶を私に差し出そうとされた老師もその枯れかけた花に気づかれた。「ああ！ あれは“ ウグイス花 ”といいますじゃ。あっ、枯れちょりますな。じゃが、このほうが面白い。踊っちょるわ！」といわれた。私は、はっと目が覚めたように驚いた。今、枯れて、死んでいく花なのに、その方が面白いという！「踊っちょるわ」と見る目。毎年、ヨーロッパをまわって聖地の女子修道院での禅の指導に行かれた宋渕老師には、「死即生」「生死一如」の禅的死生観にキリスト教の「死復活」の秘儀が、にじみ出たのであろうか。死は生の終末ではなく、新しい誕生をそこに見る。ある時も、それと違った角度からの話題を出されたことがあった。

「私は、毎年、座禅指導のため聖地に行く時、シスターたちとミサにあづからせていただきますが、本当に素晴らしいと思う。キリスト教には、まったく素人の私だが、ミサは、祈りの宇宙交響楽とでもいえるのではないでしょうか!? 間違っていましたら教えてください」といわれた。とんでもない、間違いどころか、文字通りカトリック神学そのままの名言でさえある。それも、草花という小さい自然の姿のなかに、宇宙的規模の大自然の姿を読みとる詩人宋渕老師の心の広さと鋭さを見る思いであった。枯れて死に逝く一本の花のなかに、大地に落ちる一粒の種に秘められた新しい命の鼓動を読みとる。ともあれ、あの時の老師の一言は、狭い私の視野を突き破ってくれた。

2.羅漢様

もうひとつ別の機会での小噺。美しい霊峰富士山が澄んだ空に見える天気のよい日、いつものように老師をお訪ねしたその時のこと。質素な禅寺の昼食をいっしょにいただいてから、老師といっしょにこぢんまりした奥の院の庭に出て、話しながら散策していた時のこと。老師は厚い鉄板でつくった重い下駄を履いてこられた。歩くのも不自由。勿論、速くは歩けない。禅寺の苦行には、いろいろなものがあることは知っていたが、こんなおかしな苦行があるとはそれまで知らなかった。さすがの老師も、ガッチャンガッチャンと音をたてながら後ろからゆっくりついてこられた。少し先に行くうちに途中で道の両側に立ち並ぶ十六羅漢の石像を見た。羅漢とか、阿修羅というのは、仏教での修行の最高段階に達した弟子のことで、顔も形も皆それぞれ、十人十色。先を歩きながら、ふと気づくと、厳めしく強そうな羅漢さんが大きな鉄棒を鷲づかみに握り、一頭の大きな恐ろしい顔の虎を足で踏みつけている像を見た。首ねっこを押さえつけられた虎は苦しそうに起き上がろうとして必死にもがいている。私はそれを見て思わず、「羅漢さんが虎をやっつけていますネ！」と、後ろからこられる老師の方を向いて声をあげた。すると、途端に「違う!! 羅漢さんは虎と遊んどるのじゃ！宇宙の調和じゃ！」と老師の大喝一声。私は途端にギクッとした。というのも、虎と戦う羅漢さんという風にとったのは、カトリック教会では欠くことのできない大切なマリア信心の絵や像のテーマとして、悪魔を象徴する蛇の頭を足で押しつぶすようにしている女性像（聖母マリア？）を見なれていたからである。すなわち、よく知られた「楽園喪失」の物語の一場面。「蛇と戦う女」の神話的イメージ（旧約聖書の創世記第3章15節参照）。宋渕老師

奥村　一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。

48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。 **51**年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。 **57**年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。 **59**年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。 **79**年より**2001**年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。 現在、京都聖母学院短大名誉教授。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

の視座からすると、そこでは、「虎と遊ぶ羅漢さん」になる。何だか、先の話、「チリチリ花」にもつながってくる。枯れ落ちて死にそうな花が、元気よく踊っちょる花になる。虎と戦う羅漢に見えるものが、虎と遊ぶ羅漢に変身。まさに、すべてが宇宙賛歌。戦闘的なキリスト教の神話と、調和を尊ぶ仏教の霊性が卍（まんじ）のように交錯した。

以上は、たった2つの小噺なのだが、そこに共通する心の歌があるように思われる。つまり、自然調和の感覚である。個を主張する西欧的メンタリティに根を下ろした宗教は、個の自己主張が強くなりかねない。「剣かまたはバイブルか」。仏教では、「法論は勝つも負けるも釈迦の恥」ともいわれる。これからの人類の歴史は、すべての相違を乗り越えて「皆がひとつになる」ことこそ、十字架上でキリストがその血を流した痛ましい念願であることも忘れてはならない。教祖は神の子であり、聖者であっても、罪深い人間によって固められる教団により、地上には聖戦の名のもとに悪魔の業としかいえない狂気の殺人が絶えない。まだ一年にもならない、昨年のニューヨークのテロの犠牲者の痛みがよみがえってくる。

読者のご参考として宋渕老師の略歴を添えさせていただく。

明治**40**年（**1907**）　**3**月**19**日誕生。父助太郎（陸軍軍医）が**35**歳で逝去

大正**12**年（**1923**）**17**歳　東京第一高等学校入学

昭和　**4**年（**1929**）**23**歳　東京帝国大学卒業。このころ、山本玄峰老師に師事

昭和　**9**年（**1934**）　**3**月、一高陵禅会発足。木食生活（一日一食）に入る

昭和**15**年（**1940**）**34**歳　陵禅会三昧堂（ざんまいどう）開設。一高後輩の禅教育開始

毎月**13**日、小接心（**13**日会）を開く

昭和**17**年（**1942**）**36**歳　龍澤寺第十世住職に就任

昭和**24**年（**1949**）**43**歳　イスラエル、スイス、米国など幅広く国際的に活躍

昭和**51**年（**1976**）**70**歳　ニューヨークにて国際大菩薩禅堂開設

昭和**59**年（**1984**）**78**歳　**3**月**10**日午前**4**時**30**分遷化（他界）

（＊）禅宗において、師が語録を講義したり、宗旨（根本精神）を明らかにする際に、その大要を提起して自在に説法すること。

P.G.I. のお知らせ

■ 特別チャリティー展

フランコ・メノン　写真展　　***ペシャワール －アフガンへの門戸－***

Franco Menon　*"PESHAWAR" －Gateway to Afghanistan－*

2002 **年** 7 **月**22 **日（月）～** 8 **月**9 **日（金）**

「ペシャワール会」チャリティー展

昨年9月11日の米国同時多発テロに端を発し、10月8日には米国による軍事報復が始まりました。フランコ・メノンは無名の写真家ですが、彼の写真からはペシャワールにあるアフガン難民キャンプの生の姿が伝わってきます。この写真展では写真を頒布し、その売上金を「ペシャワール会」に寄付させていただきます。メディアでは報道されることのない現地の真の姿を伝えようと、各地で精力的に講演会を行っている医師・中村哲氏（ペシャワール会現地代表）の活動を支援するためのチャリティーとさせていただきます。より多くの方々のご支援とご来場をお待ち致します。

■ **マーティン・ストゥーピッチ　写真展**

Martin Stupich　　*"Elements of Geography"*

2002 **年** 9 **月**3 **日（火）～** 10 **月**10 **日（木）**

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦 4-12-32　TEL.03-3455-7827　FAX.03-3455-8143
JR田町駅芝浦出口（東口）より徒歩 10 分［入場無料］
【営業日】 月－金　【休館日】 土・日・祝日
【営業時間】 11:00－19:00
＊P.G.I.についての詳しい情報はホームページ（http://www.pgi.ac）をご覧下さい。

表紙の言葉

写真：クリス・スティール＝パーキンス
アフガニスタン、1996年
写真提供：マグナム・フォト東京支社

教師と生徒たち
タリバンが占領する以前のマザリシャリフで

「…イスラムの初期の歴史のどこかに、キリスト教のなかにでしゃばってきた聖パウロのような妄想にとりつかれた独裁者がいたにちがいない。パウロもまた、キリストから発したはずのないいくつもの禁止令を出し、何世紀もの間、女性を苦しめ、屈辱を強いることになったのだ。進歩的なムスリムたちは、コーランのなかに女性の平等を確立してイスラム教を改革できる個所がたくさんあるという。たとえば、「女は男の半身である」「天国は母の足下にある」あるいは「女の財産を取り上げてはならない」などだ…」

『アフガニスタンの風』ドリス・レッシング（晶文社刊）より